大分市の概要

1　自然特性

本市は，九州の東端，東九州軸の北部，瀬戸内海の西端に位置し，大分県の扇状県域の要に当たり，南は臼杵市及び豊後大野市，西は別府市，由布市及び竹田市に接し，九州でも有数の広い市域を有しています。

地勢は，高崎山をはじめ鎧ヶ岳，樅木山などの山々が連なり，市域の約半分を森林が占めるなど，豊かな緑に恵まれています。また，これらの山々を縫うように一級河川である大野川，大分川が南北に貫流しながら別府湾に注いでいます。海岸部においては，北部沿岸海域は水深が深く，東部沿岸は豊予海峡に面したリアス式海岸で天然の良港となっています。このように，海，山，川の全てがそろい，自然と都市が共存する優れた都市環境を有しています。

また，大分の特産種オオイタサンショウウオ，大分県を北限とするキムラグモなどの貴重な希少種をはじめ，多くの野生生物が生息しています。国指定の天然記念物である高崎山のサル生息地や県指定の天然記念物である高島のウミネコ営巣地，ビロウ自生地など，野生生物の生息環境にも恵まれています。

2　歴史特性

縄文時代から現代まで，瀬戸内ルートを主幹にした「海の道」を媒介に歴史を刻んだ東九州の要地です。また，古代に豊後国府が設置されて以来，現代まで1300年にわたり県都としての役割を担っています。

中世・戦国時代には，九州北部に大きな勢力を築いた戦国大名大友宗麟が，聖フランシスコ・ザビエルを豊後府内に招き，海外との貿易を積極的に進めました。府内のまちは海外の品々があふれ，異国の人々が行き交い，西洋の医学，天文学，音楽，演劇をはじめとする南蛮文化がいち早く花開き，日本を代表する国際色豊かな貿易都市として繁栄しました。

江戸時代には，府内藩の城下町のほか，熊本藩の港町鶴崎・佐賀関や宿場町野津原，岡藩の港町三佐や宿場町今市，臼杵藩の在町戸次，延岡藩の代官所があった千歳，幕府領の高松など小藩分立のなか，独特の地域づくりが展開されました。

明治以降，幾度かの市町村合併により現在の本市が形成されてきました。その経緯から，旧市町村の拠点であった地区は現在も地区拠点としての機能を持ち，その地区拠点を中心に地域が形成されています。市全体としては，新産業都市として，鉄鋼，石油化学，銅の精錬など重化学工業を中心に発展し，近年では，ＩＴ関連の企業が進出するなど，様々な産業が集積しています。鉄道３線に加えて高速道路の整備が進み，県内外からの主要幹線道が合流しており，豊後水道を経由して内外に通じる海上交通の発達と相まって，東九州における拠点都市として発展を続けています。

人　口	**477,935 人**
男性	229,612 人
女性	248,323 人
世帯数	223,982 世帯
面　積	**502.39 ㎢**

（令和２年６月末現在）